

# プルーストと中動態の世界 (1)

## —「ある親殺しの感情」をめぐる—

Proust et la voix moyenne : autour de « Sentiments filiaux d'un parricide »

青柳 りさ  
AOYAGI Risa

「アルコール中毒、薬物中毒は本人の意志ややる気ではどうにもできない病気なんだってことが日本では理解されていないからね」<sup>1</sup>

### はじめに

國分功一郎の『中動態の世界 意志と責任の考古学』第1章は、「私が何ごとかをなす I do something」とはどういうことか?」「そもそも意志が最初にあったのか?」という問いかけに始まる。

たとえば、「歩こう」という意志が「私が歩く」という行為の最初にあったのかどうか。現代の脳神経科学は、脳内で行為を行うための運動プログラムが作られたあとで、その行為を行おうとする意志が意識の中に現れてくることを明らかにしている<sup>2</sup>。「私が何ごとかをなす」、「私が歩く」<sup>3</sup>「私が謝罪する」<sup>4</sup>「私が想いに耽る」<sup>5</sup>、いずれも能動態だが、その内容は能動ではない、もちろん受動でもない。ではなぜ私たちはこの能動/受動という区別を採用しているのか? それは意志の概念のせいではないのか?

能動は意志を強調する形式であり、受動はそれをひっくり返したものにすぎない。そして最新の脳神経科学は、行為の原動力としての意志の役割を否定しつつある。しかし意志という概念は、なかなか投げ捨てられない。

「責任を負うためには自分の意志で自由を選択できなければならない」。授業中の居眠りはどうだろ

うか。前の晩にどうしても眠れない事情があったとしたら。「アルコール依存症なら? 薬物中毒なら?」、そのような状況に至るからには自分ではどうにもならない、やむにやまれぬ事情があったはずである。「では殺人や性犯罪ならどうか」、やはりその責任は本人に負わせるべきではないか。その責任の根拠が、能動、受動、意志という概念に求められているのかもしれない。「意志の概念が引き合いに出されたり、行為が能動と受動に振り分けられることには、一定の社会的必要性があることを意味している」と國分は述べる<sup>6</sup>。社会的必要性によって、行動が能動と受動に振り分けられ、そして社会的必要性によってそこに意志という概念が出現したということになるのだろうか。実際、能動態が受動態ではなく中動態<sup>7</sup>に対立していた古代のギリシア世界に「意志」という概念はなかったという<sup>8</sup>。

プルーストの『失われた時を求めて』の世界の始まりには、主人公の「意志の欠如」がある<sup>9</sup>。この意志の問題をプルーストに明確に意識させる端緒となったのが、1907年、35歳のプルーストが「フィガロ」紙に寄稿した「ある親殺しの感情」という記事である。記事のなかでプルーストは次のように述べる。

この三面記事の事件がまさにギリシア劇の一つであり、その上演はほとんど宗教的な儀式であること、可哀想な親殺しの子供は畜生同然の犯罪者でも、人間性を外れた存在でもなく、まさに人間性の高貴な典型であり、明晰な精神の男であ

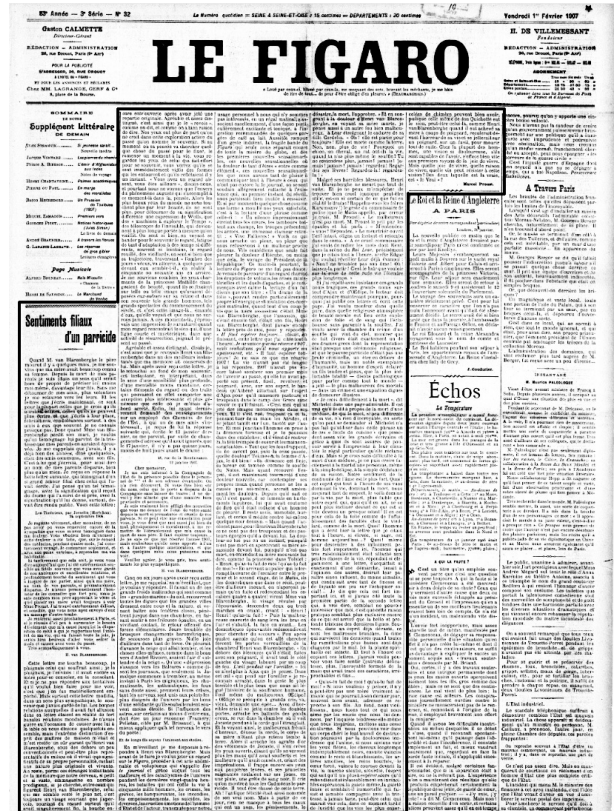
り、愛情深く敬虔な息子であったこと、絶対に避けようのない運命が—みなに口にする言い方をすれば、病理的な運命が—、この死すべき人間のなかでもっとも不幸な男をいつまでも記憶に残るにふさわしい犯罪と贖罪の中に投げ込んだのだということを、私は示したかったのである。<sup>10</sup>

ジョージ・D・ペインターは、「ある親殺しの感情」を書いた夜は、ブルーストの生涯の転回点であった<sup>11</sup>としている。

### 1 「ある親殺しの感情」(« Sentiments filiaux d'un parricide », *Le Figaro*, 1<sup>er</sup> février 1907)

1907年1月24日、アンリ・ヴァン・ブラレンベルグという青年が狂気の発作の末、80歳の母親を短刀で殺害し、自らも猟銃で自殺を遂げる。翌1月25日、ブルーストは「フィガロ」紙の三面でこの事件を知る。「狂気の惨劇」という見出しに一瞬、魅せられた後、その青年が自分と同世代で、手紙のやりとりもあったアンリ・ヴァン・ブラレンベルグであることに気づき、ブルーストは衝撃を受ける。その1週間後、2月1日のフィガロ紙の一面トップ、紙面のほぼ3分の2を占めて、この事件についてのブルーストの記事が掲載される。ブルーストの友人でもある「フィガロ」紙の社主、ガストン・カルメットの依頼によるものである。

カルメットは、衝撃的な記事を望んでいた<sup>12</sup>。ロベール・ドレフュス宛のブルーストの書簡によれば、記事を依頼するカルメットからの手紙は1月30日金曜の朝に届いている。ただし、ブルーストがその手紙に気づいたのはその夜の10時、原稿を書き始めたのは31日午前3時で、午前8時に書き終える。同日夜11時に12時までに戻せという校正刷が届いたということである<sup>13</sup>。タイトルは、「ある親殺しの感情« Sentiments filiaux d'un parricide »」、直訳すれば「ある親殺しの親への感情」となる。母親を殺した息子がいかに優しい親思いの青年であったか、すべ



「ある親殺しの感情」(「フィガロ」紙 1907年2月1日)

ての息子が母親を緩やかに精神的に殺しているのではないか? 自分たちに彼を断罪することができるのかという論調である。

ペインターはこの記事について次のように述べている。

一般化を装いながら、彼は自分の母に見られた緩慢な変化と凋落の兆候を正確に描写した。と同時に彼は自分自身のそれと同じ類のものであったヴァン・ブラレンベルグの親殺しに普遍的価値を与えることによって、それを許したのである。[...] ブルーストはヴァン・ブラレンベルグを、ソフォクレス、シェイクスピア、ドストエフスキーの悲劇の主人公、つまり狂気に駆られて牧者と羊の群れを皆殺しにしたアイアス、自分と結婚した母が自らの罪を罰するために首を吊ったのを見て、われとわが目をくりぬいたオイディプス、娘コーデリアの亡骸を抱きしめるリア王、あるいは警視の前に引き出されたディミトリー・カラマゾフなどにたとえる。それはあたかも、彼がヴァン・ブラレンベルグの罪と彼自身



のケースについて抱いた意識は、神話的な仕種、ほとんど儀式的な尊厳にみちた行為であり、真理の瞬間なのだと考えているかのようである。「親殺しの感情」を書いた夜は、彼の生涯の転回点であった。<sup>14</sup>

ヴァン・ブラレンベルグによる親殺しに「普遍的価値」を与えることが、プルーストの生涯の転回点となり、『失われた時を求めて』が始動し始める。その世界は、『ジャン・サントウイユ』をはじめとする、それ以前の著作とは一線を画するものとなる。それは、主人公が自らの意志で行動する能動と受動の世界ではなく、語り手によって「出来事」<sup>15</sup>が語られる中動態の世界である。

まずはその端緒となった「ある親殺しの感情」の成立を確認したい。

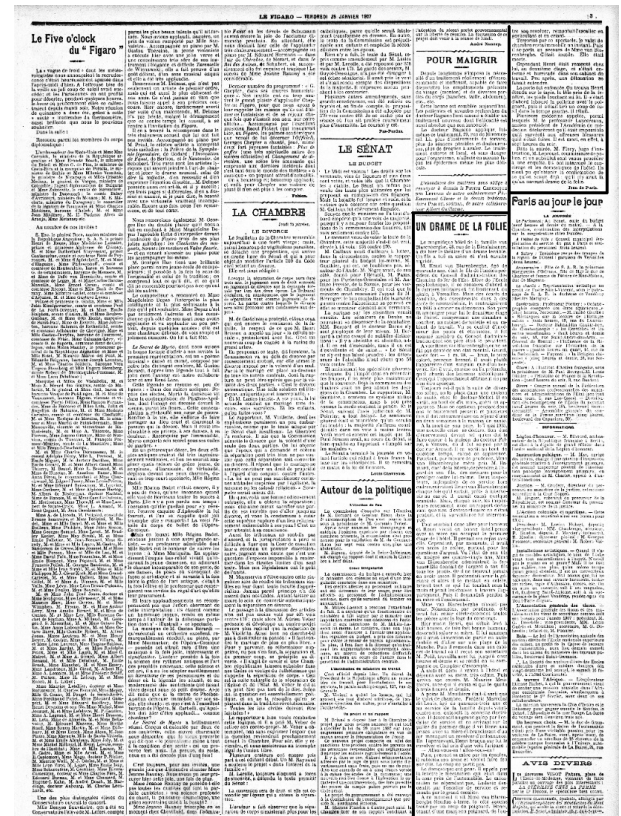
## 2 「フィガロ」紙～「マタン」紙～「ある親殺しの感情」～『失われた時を求めて』

プルーストが事件を知ったのは事件翌日、1月25日朝である。そのときの様子をプルーストは2月1日付の記事のなかで次のように記している。

しかしその日の朝「フィガロ」紙を読むことは、甘い仕事ではなかった。私はうっとりした目つきで、火山の噴火や、内閣の交代騒ぎや、ならず者たちの決闘の話などに目を通した後に、心静かに三面記事のあるニュースを読み始めた、「狂気の惨劇」*«Un drame de la folie»* というその見出しは、朝のエネルギーを生き生きと刺激するのにとりわけふさわしいかと思われた、ところがその途端、私は犠牲者がヴァン・ブラレンベルグ夫人、犯行後に自殺した犯人はその息子のアンリ・ヴァン・ブラレンベルグで、返事を書くためにその手紙を私がまだ手許においたままにしている当の人物であることに気づいた。<sup>16</sup>（「ある親殺しの感情」）

「フィガロ」紙の記事の見出しは「狂気の惨劇」となっている。「ピヤンフザンス通り48番地、ヴァン・ブラレンベルグ家の豪華な邸宅は昨日恐るべき惨劇の舞台となった。息子が母を殺害し自らも命を絶つ

ただ」<sup>17</sup>というリード文で始まる。そして、アンリの家族構成、病歴、事件当日の状況が時系列に記される。



「狂気の惨劇」（「フィガロ」紙 1907年1月25日）

要約すると、「アンリは、裕福な家族の優秀な息子である。精神を病んでいた。仕事を辞め父の会社の顧問となる。父親は邸宅の三階を改装しアンリの事務所兼住居とする。見たところは健康そうだが何度も病院に入院している。1905年に父が死ぬ<sup>18</sup>。病状は悪化。その後安定。母と生活。時々怒りが爆発、とりわけ金銭面。気に入らないと暴れて、その後謝罪。夫人は恐れてはいないが、それでも部屋のすべてを管理人の部屋と電気式の呼び鈴でつないでいる。息子の身を案じ外出の際には二人の監視をつける。しかし何事もないので監視は打ち切られる。事件当日朝8時起床、以降すこぶる順調。午前中仕事をし、一度外出し、12時30分帰宅。母と昼食をとり、従兄弟の訪問を受けるが、3時30分、従兄弟が帰るとすぐに呼び鈴が鳴る。従僕が駆けつけると二階の踊り



場でアンリが母をつかんで銃で脅している。従僕に「行け！」と叫び、母親に銃口を向けるが弾が出ない。従僕が助けを呼びにいった戻ってくると、夫人が左脇をナイフで刺されて倒れている。アンリは銃とナイフを持って叫びながら自分のアパートマンへと駆け上がる。夫人は死んでいた。アンリは部屋にこもり、まもなく銃声が聞こえる。警察がドアをこじ開けてなかに入ると、アンリは床に、窓側に頭ベッド側に脚という体勢で、胸を刺し、左こめかみを銃で撃ち抜いて喘いでいた。医者が何人も呼ばれその中には医学アカデミーの元会長もいた。19時に息をひきとった」というものである。

「フィガロ」紙の「狂気の惨劇」という見出しが、まずブルーストの目を引いたのだが、しかし、彼が自分の文章に引用するのは、むしろ同日夕方の「マタン」紙からである。なるほど、時間の経過もあり、また新聞の傾向もあって、「マタン」紙の方はかなり具体的である。が、なによりその内容がブルーストの琴線に触れたようである。



「彼は母親を殺害し自殺した」(「マタン」紙 1907年1月25日)

「マタン」紙の方は、一面から二面にかけてこの事件をとりあげている<sup>19</sup>。見出しは、「彼は母を殺害し自殺した」*« Il tue sa Mère et se suicide »*、リード文は、「アンリ・ヴァン・ブラレンベルグ氏が、狂気の発作の末、80歳の母親を銃で倒し<sup>20</sup>、自らの首を短刀で刺したのち猟銃で自殺した」となっている。記事本文には、「恐ろしい惨劇がビヤンフザンス通り48番地で起こった。フランス東鉄道元社長の息子アンリ・ヴァン・ブラレンベルグ氏が母親を殺害しこのうえなくおぞましい状態で自殺した。ビヤンフザンス通り48番地にそびえ立つルイ13世様式の堂々たるファサードをもつ荘厳な邸宅。建物の背後にはフランス式庭園が(裏の通りである)トレアル通りまで広がっている」と、読者の好奇心を否が応でも誘う書き出しである。ついで記事は「背景」、「事件前 (Les préliminaires du drame)」、「事件 (Le drame)」、「検証 (Les constatations)」と展開するが、

「フィガロ」紙よりも具体的であり野次馬的でもある。「事件」の部分の引くと「従僕のマレシヤルは長年アンリ・ヴァン・ブラレンベルグ氏の発作について知っていたので、呼び鈴が尋常でない鳴り方をしたとき何かが起こったと直感した。二階の踊り場で女主人と息子がかみあっている。息子は手に銃を持って母親にむけて撃とうとしており母親は銃をとりあげようとしている。母親の肩をつかみ揺さぶる。使用人に気づくと息子は一步後ずさりし銃を彼に向け「行け、行くんだ！」と言って引き金を引いた<sup>21</sup>、が弾は出なかった。[助けを呼びに行く] 3人が階段を上がってくる。遅かった。①少なくとも惨劇の第一場はすでに起こってしまっていた。二階と三階の間の踊り場のところまで来たとき、3人は、ヴァン・ブラレンベルグ夫人が恐怖に顔をひきつらせ、②「アンリ！ アンリ！ 落ち着いて！ 何てことをしたの！」と叫びながら階段を二、三段降りるのを目にした。それから血まみれになった不幸な女は両腕をあげうつ伏せにぼったり倒れた。その後ろで狂人は血の滴る短刀を手にしており、その短刀で自分の胸と首を思いっきり切りつけた。[...] 4人の警官が来て母親をベッドに運ぶが、すでに死んでいた。アンリは姿を消していた。」「検証」では「通報を受けてプルス警視<sup>22</sup>がやってくる。判事のフォーリー氏も呼ばれる。アンリのアパルトマンの扉はすべて斡旋されていて、アンリの部屋にいたままで次々と扉を打ち壊していかなければならない。アンリは自分の部屋のベッドと机の間の床にいて、足の間には銃を挟んでいる。[...] ③殺人者は短刀を自分の体に突き刺していくつもの傷を負っていたばかりか、顔の左側全体が銃で撃たれて深く抉られていて眼球と顔の残骸が枕の上に垂れ下がっていた。④不幸な男はまだ死んでいなかった。プルス警視は、その肩を掴むと、「聞こえるか？ こたえなさい」と言葉をかける。アンリは無事な方の目を開き一瞬まばたきすると再び昏睡状態に陥った。」「検証」では、⑤「自分のアパルトマンに戻って、狂人は自分のしたことに向き合ったのだろう。銃をとり弾をこめようとしたがうまくいかず他の銃を取り、また

他の銃を取り、そして猟銃に気づき、カルトウツシュを込め左のこめかみに発射した」とある。

下線部②の「アンリ！ アンリ！ 落ち着いて！ 何てことをしたの！」<sup>23</sup>という「マタン」紙の記述に、プルスはトルストイの『戦争と平和』からアンドレイ公爵夫人の言葉を想起する。

苦悩は即座に人を殺害するものではない、というのも、自分の前に殺された母親を認めたときに、アンリは死んでいなかったからであり、また瀕死の母が彼に向かって、トルストイの作品にあらわれたアンドレイ公爵夫人のように「アンリ、お前は私になんてことをしたの！ 私になんてことをしたの！」と言うのを聞いたときも、アンリは死んでいなかったからである。<sup>24</sup>（「ある親殺しの感情」）

また、下線部③の「殺人者は短刀を自分の体に突き刺していくつもの傷を負っていたばかりか、その顔の左側全体は銃弾で深く抉られていて、眼球と顔の残骸が枕の上に垂れ下がっていた」<sup>25</sup>という記述から、自らの眼球を抉り取るオイディプスを思い、さらには娘を失ったりア王の悲しみを喚起する。

「短刀を自分の体に突き刺していくつもの傷を負っていたばかりか、顔の左側は銃弾でえぐられていた。眼球が枕の上に垂れ下がっていた。」ここで私が考えるのはもはやアイアスのことではない。この「枕の上に垂れ下がった」眼のなかに私は、人間の苦しみの歴史がわれわれに伝える最も恐ろしい行為によってえぐり取られた不幸なオイディプスの眼そのものをみとめる。<sup>26</sup>（「ある親殺しの感情」）

そして私は、死んだ母親を見たときのアンリ・ヴァン・ブラレンベルグの苦悩を思いながら、もう一人の甚だ不幸な狂人のことを、娘のコーデリアの遺体をかき抱くリア王のことを考える。「おお！ この娘は永久にいつてしまった！ まるで土くれのように死んでしまった。否、否、もう生きてはいない！ どうして犬も馬も鼠も生きているのに、お前はもはや息さえしないのだ？ お前はもう決して帰ってきはない！ 決して！ 決して！ 決して！ 決してだ！ 見よ！ 見よ、この



唇を！見よ、この娘を！」<sup>27</sup>（「ある親殺しの感情」）

母を殺害した後、自らの眼球を撃ち抜いたアンリの苦悩と、母を死に至らしめたことを知り自らの眼球を抉りとったギリシア悲劇の王オイディプスの苦悩、死んだ母を前にしたアンリの苦悩と死んだ娘コーデリアを抱くリア王の苦悩はブルーストにとっては同じものなのである。

さらに下線部④の、「不幸な男はまだ死んでいなかった。ブルースト警視は、その肩をつかむと、「聞こえるかい？ こたえなさい」と言葉をかけた。殺人者は無事な方の目を開き一瞬まばたきすると再び昏睡状態に陥った」<sup>28</sup>という箇所にもブルーストは反応し、警視の行為を、気を失っているリア王の目を覚ませようとするエドガーの行為にたとえる。

アンリ・ヴァン・ブラレンベルグは、ひどい傷だったにもかかわらず、すぐには息をひきとらなかつた。そして私は、警視のとった行為がひどく残酷なものだという思いを禁じえない。「不幸な男は死んでいなかった。警視はその肩をつかむと、「聞こえるかい？ こたえなさい」と話しかけた。殺人者は無事な方の目を開き一瞬まばたきすると再び昏睡状態に陥った。」この残酷な警視にたいして、私はちょうど今しがた引用したばかりの『リア王』の場面で、すでに気を失っているリアの目を覚ませようとしたエドガーに、ケントがそれを制止したときの言葉をもう一度伝えたい気持ちになる、「いや、王の御霊を乱してはなりません。ああ！ 御霊をそのまま発させてあげなされ。これ以上この無情な世の中の拷問台に王をおかけしようとするのは、王を憎み申し上げることになります。」<sup>29</sup>（「ある親殺しの感情」）

ここでも、ブルーストは、アンリとリア王を同一視する。「リア王」はそのまま「アンリ」に置き換わる。「アンリの魂を乱してはならない、そのまま発させてやってほしい、これ以上無情な世の中の拷問台にかけることはアンリを憎むことになる。」

下線部⑤は「検証」、すなわち記事のほぼ最終箇所である。「自分のアパートマンに戻って、狂人は自

分のしたことに向き合ったのだろう。銃をとり弾をこめようとしたがうまくいかず他の銃を取り、また他の銃を取り、そして猟銃に気づき、カルトウッシュを込め左のこめかみに発射した。」<sup>30</sup>ブルーストは、アテナによって吹き込まれた狂気から我にかえったアイアスにアンリを重ねる。

狂人たちは切りつけているあいだは何もわからない、ついで発作が過ぎ去ると、なんという苦悩であろうか！ アイアスの妻テクメッサがそのことを語っている、「あの方の狂気は終わり、狂乱は疾風が凧ぐようにおさまりました。けれども正気にもどった今、あの方は新たな苦悩に打ちひしがれておられます。それといいますのも、他のだれが引き起こしたのでもない自分自身の悪事を見つめるのは、苦悩をますます苦しいものにするからです。一部始終を知ってからというもの、あの方は悲痛な叫び声をあげて嘆き悲しんでおられます、つねづね、涙を流すのは男らしからぬことだと口癖のように言っておられたかたですのに。じっと動かず座ったまま、ただ叫び喚いておられます、そしてきっとご自身にたいしてなにやら暗い計画を考慮しておられるに違いありません。」<sup>31</sup>（「ある親殺しの感情」）

「フィガロ」紙の「狂気の惨劇」という見出し、そして「マタン」紙のたとえば、下線部①「少なくとも惨劇の第一場はすでに起こってしまっていた」<sup>32</sup>という言い回しを受けつつ、三面記事の事件はブルーストにとってはまさしく現代のギリシア悲劇に<sub>変容</sub>する<sup>33</sup>。

このような悲劇の偉大な名前、とくにアイアスとオイディプスの名を、私が執拗に繰り返したことで、読者は何故、私があの手紙を公表し、そしてまたこの文章を書いたかを理解されるはずである。私は精神の美に溢れた、どれほど純粋でどれほど宗教的な雰囲気の中で、この狂気と流血の炸裂が起こったかということを、しかもその炸裂は周囲に飛び散りながらもその雰囲気を汚しはしなかったということを示したかったのだ。私は犯罪の部屋に、天からの息吹を通じたかった、そしてまた、この三面記事の事件がまさにギリシア劇の一つであり、その上演はほとんど宗教的な儀式であること、

可哀な親殺しの子供は畜生同然の犯罪者でも、人間性を外れた存在でもなく、まさに人間性の高貴な典型であり、明晰な精神の男であり、愛情深く敬虔な息子であったこと、絶対に避けようのない運命が—みなに口にする言い方をすれば、病理的な運命が—、この死すべき人間のなかでもっとも不幸な男をいつまでも記憶に残るにふさわしい犯罪と贖罪の中に投げ込んだのだということを、私は示したかったのである。<sup>34</sup>（「ある親殺しの感情」）

アテナによって狂気を吹き込まれて殺戮を行ったアイアス、父を殺し母と結婚するという神託のもとに生まれてきたオイディプス、病理的な運命を背負ったアンリに起こったことは、背景は違え、本質的には<sup>35</sup>同じなのである。アンリの友人たちは、悲しみを再燃させるこの記事に不快な思いをし<sup>36</sup>、ブルーストの友人たちは、才能と独創性にあふれたこの記事を賞賛した<sup>37</sup>ということである。記事は以下のように締めくくられる。

「お前は私の私になんていうことをしたの！ なんていうことをしたの！」考えてみれば、本当に子供を愛している母親で、臨終の日に、いやしばしばそれよりずっと以前にも、こうした非難を息子に向けなかったものは一人もないかもしれない。結局のところ、われわれは老いていく、そして、われわれを愛してくれる者に与える心配や、その人たちに吹き込む気がかりな愛情、たえずわれわれが不安をかき立てている愛情によって、その人たちを殺している。愛する者の肉体のなかに、その人をかき立てる苦悩に満ちた愛情によってゆっくりと破壊作業が遂行されているのを目にするなら、その眼はかすみ、長い間頑として黒さを守り続けたその髪の毛も、他の部分と同様についに屈服して白くなり、動脈は硬化し、腎臓はつまり、心臓は無理が祟り、人生に立ち向かう勇気も挫けて、歩き方もろろと重くなり、かつては飽くこともなしに不屈の希望へと飛躍を繰り返した精神も、もはや希望しても無駄であると観念してしまい、不滅とも思われた悲しみの優しい伴侶であった生来の快活さすらが、永久に涸れてしまったのを目にするなら、それを目にすることができる者は、遅まきにやってくる明晰な瞬間、どんなに空想にとらわれた人生にも訪れることのあるその瞬間に、ドン・キ

ホーテの人生にさえそのような瞬間があったのだから、おそらくは短刀をふるって母親の息の根を止めたときのアンリ・ヴァン・ブラレンベルグのように、自分の人生の醜悪さを前にして尻込みをし、銃に飛びついて、直ちに自殺するかもしれない。多くの者の場合、これほどの痛ましい光景も（彼らがそこまで自分を高めると仮定しての話である）、生きる喜びの光がちりとさしてきさえずれば、たちまち消えてしまう。けれども、いかなる喜び、いかなる生きる理由、いかなる人生が、この光景に抵抗できようか？ この光景と喜びと、いずれが真実なのか。「真実」ととはそもそも何なのだろうか。<sup>38</sup>

1907年の「フィガロ」紙の記事はここで終わる。そしてこの記事から6年後、1913年、『失われた時を求めて』の第一巻はここから始まる。『スワン家の方へ』冒頭、「コンプレ」の章の「就寝劇」の場面である。

かくして、はじめて、私の悲しみはもはや罰すべき過ちではなく、意図せざる病とみなされ、私には責任のない神経症状と公式に認められたのである、私は、辛い涙に良心の呵責をまじえる必要がなくなりほっとした、罪悪感なしに泣けるのだ。[...]私は満足して当然だったが、実際はそうではなかった。母は私に最初の譲歩をしたのだがそれはきっと辛かったにちがいない、それは母が私に抱いていた理想の最初の放棄であり、あれほど気丈な母がはじめて敗北を認めた気がしたのである。私が勝利をおさめたとしても、それは母の気持ちに反してであり、病気や深い悲しみや年齢がそうするように、母の意志を弱め、道理を曲げさせるのに成功したのである、この夜は新しい時代の始まりであり悲しい日付として残るように思われた。[...] たしかに、母が私の両手を優しくとり涙を止めようとしてくれたあの夜、母の美しい顔はいまだ若さに輝いていた、しかしだからこそ私はこんな事態になるべきではなかったと思われた、子供時代にまだ味わったことがなかったこの新たな優しさよりも、母に怒られたほうがまだ悲しくはなかっただろう、私には、目に見えない不孝な手で、母の魂に最初の皺を刻みつけ、最初の白髪を生じさせた気がしたのだ。そう思うと私の嗚咽はますますひどくなった。<sup>39</sup>

「意図せざる病」を認められた語り手の「いつまでも記憶に残る贖罪」は、しかし、銃をとって自ら命を絶つことではない。

### 3 削除された最終段落

「ある親殺しの感情」は、「フィガロ」紙の社主であるガストン・カルメットに依頼されて書かれたものであるにも関わらず、そしてあえて読者に衝撃を与えることをねらった依頼であったにもかかわらず、原稿の最終段落は削除されることになる。それは、プルーストがとりわけこだわった記事の締めくくりであった。新聞に記事が掲載されたその日のうちにプルーストはカルメットに次のように書きおけている。

残念なことがひとつあります。[...] カルダヌス氏<sup>40</sup>に使いを介して、どこでも好きな部分を切っても結構ですが、あの最後の数行だけは省かないようにと伝えて、それこそが唯一大事なところですが、とはっきり申し上げておきましたのに、まさにそこが削除されてしまいました。[...] 記事はつぎのように終わるはずでした。

「古代人にとっては、コロノスのオイディプスの墓と、スパルタのオレステスの墓ほど、深い崇拜と盲信に包まれ、神聖なものとした祭壇はなかったこと、この二人を所有していた大地、この二人を貴重なものとして争ってきた大地にとって、これほどの偉大さと栄光とを保証する祭壇は存在しなかったことを思い起こそうではないか。復讐の女神エリニースたちは、こう言いながらそのオレステスを、アポロンの足許までも、またアテネの足許までも、追跡して行ったのであった、「祭壇から遠く離れたところへと私たちは追放するのだ、この親殺しの息子を (le fils parricide)」と。

かくして、記事の冒頭に使われた親殺し (parricide) という言葉が、記事を締め括るはずでした。それによって一種の統一性が、この記事に否が応でももたらせることになっていました。(1907年2月1日、ガストン・カルメット宛)<sup>41</sup>

カルメットの返信は以下の通りである。

あなたの記事は見事な出来栄でした。私の親愛なる寄稿家にして素晴らしき友よ。どうかあの最後の数行に気遣いなさいませぬよう。カルダヌスはあの数行に怯えたのです、不幸な親殺しの行為にたいする咎めが不十分だと考えたのです。カルダヌスはたしかに誤解していますが、しかしあなたに感謝し魅せられたまま再読しない読者など誰ひとりとしていないでしょう。(1907年2月1日、カルメットからの返信)<sup>42</sup>

同日の夕方、プルーストはさらにカルメットに書きおくる。

かつて「ジュルナル・デ・デバ」紙で (カルダヌス氏の) 同僚であったサン・マルク・ジラルダン (彼は背德的だとはみなされていませんでした) は、『劇文学講義』のなかで、このようなギリシア人の信仰、つまり、オイディプスとオレステスの遺灰を有すれば、その都市は、つねに勝利をおさめるであろうという信仰について、きわめて気品のある文を書いております。ジラルダンはそこにギリシア人の高尚な哲学の影響を認めていたのです。ギリシア人は、かの親殺したちの罪は、たとえそれが無意志のなせるものであろうと、彼らが生きている間に罰せられねばならぬ、しかしより高度な正義を回復するためには、親殺したちは無意志で罪を犯したもののゆえ、その者たちの名誉は称えられ、神前に捧げられねばならぬ、と考えていました。厳格なるカルダヌス氏とて、オイディプスの遺骸とオレステスの遺骸を奪取せんがためにアテネとスパルタが支援した戦のすべてはご存じのはず、神託は、唯一彼らの遺骸のみが都市国家の権威を保証しうるだろう、と予言していました。<sup>43</sup>

オイディプスは、「父親を殺し母親と結婚するだろう」という神託のもとに生まれ、父と知らずに父を殺し母を娶り、それと知った母は自ら命を絶つ。そのことを知ると自分の両眼をえぐり彷徨の旅に出、アテナイで没する。オレステスはアポロンの神託に従い、姉エレクトラとともに、父を殺した母とその愛人を殺害し父の仇を討ち、その後アポロンと



アテナの弁護により無罪となる。

オレステスを追いかけていく復讐の女神エレニュスたちは、アンリを断罪する人々である。しかし、ギリシアの時代であればオイディプスもオレステスは赦される。それどころか、「古代人にあつては、コロノスのオイディプスの墓と、スパルタのオレステスの墓ほど、神聖なものとした祭壇はなかった」、「より高度な正義を回復するためには、親殺したちは無意志で罪を犯したのゆえ、その者たちの名誉は称えられ、神前に捧げられねばならぬ」とプルーストは断言する。しかしその親殺しにアンリ・ヴァン・ブラレンベルグの名前をあてはめるならば、この文章は、プルーストの時代にあつては（そしておそらく現代においても）、削除されるべき「社会的必要性」<sup>44</sup>があつたということになるのだろう。

#### 4 『1908年の手帖』から

1907年1月31日未明に一気に書き上げられたこの文章は一過性のものではなく、その後のプルーストの作品への布石となっていく。『1908年の手帖』には、「ヴァン・ブラレンベルグに『聖ジュリアン伝』を引用すること、忘れないこと<sup>45</sup>」と、プルーストがフロベールの『聖ジュリアン伝』<sup>46</sup>を加えて書きかえようとしていたことが記されている。

物語を要約すると、「城主の息子として生まれたジュリアンは、予言に翻弄され残虐の限りを尽くす。一旦は改心して平穩に暮らす、自分を訪ねてきた老いた両親が妻のベッドに寝ているのを勘違いして殺害したのち、全てを投げうって物乞いをしながら諸国を放浪し、自らを無にして客人をもてなす。キリストとともに昇天し、聖人となる」というものである。

『1908年の手帖』を編集したフィリップ・コルブは、「このメモが「ある親殺しの感情」に関わるものであること」、「この文章でプルーストは常につきまっていたサディズムの問題を検討していること」、「「親殺し」という点でフロベールのコントを引用し忘れていたらしいこと」、「このメモをし

たときプルーストは評論集の出版を目論んでおり、そのなかに「親殺しの感情」も入っていたこと」、「しかし出版社が見つからず、戦後1919年になって『模索と雑録』を刊行することになったときには、そのなかにフロベールについての言及も編集者によって削除された最終段落も含まれることはなかったこと」を確認している<sup>47</sup>。

鈴木道彦は、削除部分が復活しなかったことについては、「その頃（『模索と雑録』刊行時）のプルーストは『失われた時を求めて』の完成に夢中で、10年以上前の原稿のことは忘れていたのかもしれない」<sup>48</sup>、また『聖ジュリアン伝』については、「このオイディプスとオレステスへの言及は、最後の言葉が示すように、「親殺し」という一点を軸としている。プルーストが1908年に「手帖」のなかで『ジュリアン聖人伝』を引用すること」と記していることも、このテーマにたいする彼の執拗な関心を証拠だてているだろう。フロベールが『トロワ・コント』のなかに描いたジュリアン聖人もまた、親殺しの子供であった<sup>49</sup>と註解している。

コルブは、「ある親殺しの感情」において、プルーストは自らに「常につきまっていたサディズムの問題を検討している」としているが、むしろサディズムのテーマは、「親殺し」のテーマから派生した二次的なものであるようにも思われる。『失われた時を求めて』のなかで、サディズムのエピソードとしてまず思い浮かぶのは、作中の作曲家ヴァントゥイユの娘のエピソードだが、ヴァントゥイユ嬢は同性愛という気質によって父親を悲しませ、その死を早めてしまう。さらに父親の死後、女ともだちとともに父の写真を冒瀆する。しかしこの恋人たちはのちにはヴァントゥイユが残したソナタを七重奏曲として完成させることになる。

語り手は最終章で「エルスチールやシャルダンのようにわれわれはまず愛するものを捨てなければ、愛するものをふたたび生み出すことはできないのだ」<sup>50</sup>と述懐するが、これはヴァントゥイユ嬢にあつても、また語り手にあつても然りである。

これに続く段落で語り手は、「一粒の麦、地に落ち

て死なずば、ただ一つにてあらん、もし死なば、多くの果を結ぶべし」という『ヨハネ伝』の第12章24節を引き、「病は私を社交界において死なせることによって私に尽くしてくれた」、「怠け心は安易に筆が流れるのを防いでくれたが、それに続く病はその怠け心から私を守ってくれるかもしれない」と思いを巡らせる。

私は、「まだ時間があるだろうか?」というだけでなく、「今でも私にできるのだろうか?」と自らに問うた。なるほど病は、厳しい聴罪司祭のように、私を社交界において死なせることによって私に尽くしてくれた、というのも「一粒の麦、地に落ちて死なずば、ただ一つにてあらん、もし死なば、多くの実を結ぶべし」であるからだ、また怠け心は安易に筆が流れるのを防いでくれたが、それに続く病はその怠け心から私を守ってくれるかもしれない、病は私の力をすり減らしてしまっていた、そしてずっと前から、とりわけアルベルチヌを愛するのをやめたときから気づいていたことだが、私の記憶力もすり減らしてしまっていた。ところで記憶によって印象を再創造することは、ついで印象を深く掘り下げ、明らかにし、これを知性の等価物に変容させなければならないのだが、先ほど書齋で私が考えたような芸術作品の条件の一つ、そのほとんど本質とも言えるものではなかっただろうか。ああ! さっき『フランソワ・ル・シャンピ』を見つけたときに思い起こしたあの夜、あの夜にはまだそっくり残っていた力をまだ私が持っていたら! 緩やかに進行した祖母の死とともに、私の意志と健康の衰えが始まったのは、母が譲歩したあの夜からだ。すべてはあの時に決定していたのだ、母の顔に唇を押しあてるのを翌日まで延ばすことに堪えられなくなって、思い切ってベッドから飛び降りると、寝間着姿のまま月の光のさしこむ窓のところにいき、スワン氏の帰る足音が聞こえるまでそこに陣取った。両親はスワン氏を送ってゆき、私の耳には、庭の戸が開き、鈴が鳴り、また閉まる音が聞こえてきたのだった…。<sup>51</sup>

「一粒の麦」は、一方で、アンドレ・ジッドの『一粒の麦もし死なずば』も想起させる。自らの同性愛の性癖を明らかにするジッドの自伝的小説である<sup>52</sup>。そこには、プーレスト自身は否定しているが、

ヴァントウユ嬢と同様、自らの性癖によって母を苦しめたプーレストの姿が透けて見える。

かくして、語り手は作品と向き合うことになる。『失われた時を求めて』という膨大な作品は、プーレストの大いなる意志のもとに書かれたのではなく、意志の欠如とともに、意志の欠如によって母親の緩慢な死に手を貸すことによって始まるのである。

## 結び

プーレストは1905年9月26日に母を亡くす。アンリ・ヴァン・ブラレンベルグの事件は1907年1月25日、1週間後の2月1日に「フィガロ」紙にプーレストの文章が掲載される。そしてその2週間後の2月15日に母親を亡くした友人のジョルジュ・ド・ロリスに宛てて、プーレストは見舞いの手紙も含めて、2月10日、2月16日、2月17日、2月18日、2月18日以降と、少なくとも5通の手紙をおくっている。

いま、あなたは母上が傍におられた日々を思っているらっしゃる。その時が永遠に昔の中に投げ込まれるというこの恐ろしいことに慣れたとき、そのときあなたはお母上が少しずつ蘇り、あなたのそばにふたたびその場所を占めるのを感じられるようになるでしょう。<sup>53</sup> (2月18日)

あまりにも一心に思い浮かべようとする、かえって思い浮かべることができないものです。[...]。いまは、ただ生きること、意志の協力を求めることなく、すべてあなたのなかでなるにまかせて、ただ生き続けることに努めてください、そうすれば優しいお母上の姿が自然に蘇り、もう二度とあなたを離れることはないでしょう。<sup>54</sup> (2月18日以降)

「真の楽園とはひとたび失われた楽園だからである」<sup>55</sup>という『見出された時』で述べられるプーレストの思想が、すでに1907年の書簡のなかにあらわれている。楽園は意志の力で回復されるものでは勿論ない。

そのとき作家は理解する、画家になりたいという夢は、意識



的な、また意志的な形では、実現できないものだったが、にもかかわらずそれは実現されており、作家もまた知らないうちにクロッキーの手帳をつくっていたことを。<sup>56</sup>

『失われた時を求めて』の読者は、ジュリアン・ソレルもモンテ・クリスト伯も登場しない、それどころか語り手すらもほとんど参加することのない延々と続く社交界の会話に付き合わされる。スワンは、自分の好みのタイプではない女と自分の意志に反して人生最大の恋に落ちる、そしてその理由をあれこれと後付けするが、しかし「スワンの恋」の章を締めくくるのは、彼が吐き捨てるように独り言つ「気に入らなければ好みでもない女のために、死にたいと思い、最大の恋をし、人生の何年も台無しにしてしまった」という言葉である<sup>57</sup>。コンプレのなんでもない台所は夢幻劇の舞台へと変貌し、アスパラガスはその貴重な本質をのぞかせる。ブルーストの世界は「見る／見られる」という能動／受動の世界ではなく「見える」という中動態の世界である。

本論では、その「見える」世界への転回点となった「ある親殺しの感情」をとりあげた。次にとりあげるのは、「見える」世界、「意志的な形では、実現できないものだったが、にもかかわらず実現された」ブルーストの作品世界である。

## 略記

I, II, III, IV :

Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade) I~IV vols.1987-1989.

CSB :

Marcel Proust, *Contre Sainte-Beuve* précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi de *Essais et articles*, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), 1971.

Correspondance :

*Correspondance de Marcel Proust*, texte établi, présenté et annoté par Philip Kolb, I~XXI, Plon, 1970-1993.

## 註

- 1 國分功一郎『中動態の世界 意志と責任の考古学』医学書院 2017年 p.4.
- 2 Benjamin Libet, Curtis A. Gleason, Elwood W. Wright, Dennis K. Pearl, « Time of conscious intention to act in relation to onset of cerebral activity (readiness-potential). The unconscious initiation of a freely voluntary act », *Brain*, 106 p.623-42, 1983; Benjamin Libet « Unconscious cerebral initiative and the role of conscious will in voluntary action », *The Behavioral and Brain Sciences*, 8, p.529-566, 1985.
- 3 「「私において歩行が実現されている」と表現されるべき事態であった」 國分功一郎 前掲書 p.20.
- 4 「実際には、私が謝るのではない。私のなかに、私の心のなかに、謝る気持ちが現れることこそ本質なのである」 同書 p.19.
- 5 「私は「想いに耽るぞ」と思ってそうするわけではない。何らかの条件が満たされることで、そのプロセスがスタートするのである」 同書 p.18.
- 6 同書 p.14-38. 強調は筆者による、以下同様。
- 7 「中動態とはかつてのインド=ヨーロッパ語にあまねく存在していた態である。「インド=ヨーロッパ語」とは、現在の英独仏露語などのもとになった諸言語のグループ（語族）のことで、これに属する諸言語は、古代-確認されている限りでは少なくとも8000年以上前の時代-より、インドからヨーロッパにかけての広い範囲で用いられてきた。それらの言語が持つ動詞体系には、長きにわたり、能動態と受動態の対立は存在しなかった。そのかわりに存在していたのは、能動態と中動態の対立である。われわれは能動態と受動態を対立させる考えに慣れ切ってしまっているためにこれを不思議なことと思ってしまうが、受動態は随分あとになってから、中動態の派生形として発展してきたものであることが比較言語学によって、すでに明らかになっている。」 同書 p.41.
- 8 「実在する一切のものには、その原因の一つとしての可能態が先行しているはずだ、という[アリストテレス的]見解は、暗々裏に未来を、真正な時制とすることを否定している。すなわち未来は過去の帰結以外のなにものでもない[...]。このような事情のもとでは、記憶が過去のための器官であるような具合で、意志を未来のための器官とする考えはまったく不必要なものだった。アリストテレスは意志の実在を認識する必要がなかった。つまりギリシア人は、われわれが「行動の原動力」だと考えているものについての「言葉さえもっていない」のだ。」 同書p.97-98. (Hannah Arendt, *The life of the Mind, Two / Willing*. One-volume Edition, Hartcourt, 1978, p.15/ハンナ・アレント『精神の生活(下) 第2部 意志』佐藤和夫訳、岩波書店、1994年、p.18-19)

- 9 「ああ、私は知らなかったのだが、そのとき祖母の心を悲しく占めていたのは、夫の些細な不摂生よりもはるかに、私の意志の欠如、虚弱な体質、それらが私の将来に投げかける不安だったのだ [...]。」
- « Hélas ! je ne savais pas que, bien plus tristement que les petits écarts de régime de son mari, mon manque de volonté, ma santé délicate, l'incertitude qu'ils projetaient sur mon avenir, préoccupaient ma grand'mère, au cours de ces déambulations incessantes, de l'après-midi et du soir, où on voyait passer et repasser, obliquement levé vers le ciel, son beau visage aux joues brunes et sillonnées, devenues au retour de l'âge presque mauves comme les labours à l'automne, barrées, si elle sortait, par une voilette à demi relevée, et sur lesquelles, amené là par le froid ou quelque triste pensée, était toujours en train de sécher un pleur involontaire. » (I, 12-13)
- 「かくして、はじめて、私の悲しみはもはや罰すべき過ちではなく、意図せざる病とみなされ、私には責任のない神経症状と公式に認められたのである」
- « Ainsi, pour la première fois, ma tristesse n'était plus considérée comme une faute punissable mais comme un mal involontaire qu'on venait de reconnaître officiellement, comme un état nerveux dont je n'étais pas responsable ; [...] ». » (I, 37)
- 10 « J'ai voulu aérer la chambre du crime d'un souffle qui vînt du ciel, montrer que ce fait divers était exactement un de ces drames grecs dont la représentation était presque une cérémonie religieuse, et que le pauvre parricide n'était pas une brute criminelle, un être en dehors de l'humanité, mais un noble exemplaire d'humanité, un homme d'esprit éclairé, un fils tendre et pieux, que la plus inéluctable fatalité — disons pathologique pour parler comme tout le monde — a jeté — le plus malheureux des mortels — dans un crime et une expiation dignes de demeurer illustres. » (« Sentiments filiaux d'un parricide », *Le Figaro*, vendredi 1<sup>er</sup> février 1907, p.1. / *CSB*, 1971, p.157)
- 11 « The night on which he wrote 'Filial Feelings of a Matricide' was a turning-point in Proust's life. » (George D. Painter, *Marcel Proust, A Biography II*, Chatto & Windus, London, 1965, p.71)
- 12 « Carmette avait appris l'existence des lettres d'Henri Van B\*\*\*. Aussitôt, il souhaite pour *le Figaro* cette chronique qui risquait de déplaire et qui déplut aux abonnés. » (Robert Dreyfus, *Souvenirs sur Marcel Proust*, Grasset, 2013 (1926), chap. VII, p.156)
- 13 A Robert Dreyfus, le dimanche 3 février 1907, *Correspondance VII*, p.61-65.
- 14 « In a pretended generalisation he had described the exact symptoms of his own mother's slow torment and decline ; and conversely he had condoned van Blarenberghe's matricide, which was also his own, by making it universal. [...] Proust compared van Blarenberghe to the tragic heroes of Sophocles, Shakespeare and Dostoevsky — to Ajax in his madnes slaughtering the shepherds and their sheep, Oedipus tearing out his eyes at the sight of his mother-wife selfhanged for his sin, Lear bending over Cordelia dead, Dmitri Karamazov and the police-captain ; and it was as if he saw van Blarenberghe's crime, and his own insight into its real nature, as an act of mythological, almost ritual dignity, as a moment of truth. The night on which he wrote 'Filial Feelings of a Matricide' was a turning-point in Proust's life. » (George D. Painter, *op.cit.*, p.70-71)
- 15 「出来事は能動的でも受動的でもない」(國分功一郎 前掲書 第7章「中動態、放下、出来事—ハイデッガー、ドゥルーズ」p.197-228)
- 16 « Ce matin-là pourtant la lecture du *Figaro* ne me fut pas douce. Je venais de parcourir d'un regard charmé les éruptions volcaniques, les crises ministérielles et les duels d'apaches et je commençais avec calme la lecture d'un fait divers que son titre : « Un drame de la folie » pouvait rendre particulièrement propre à la vive stimulation des énergies matinales, quand tout d'un coup je vis que la victime c'était Mme van Blarenberghe, que l'assassin, qui s'était ensuite tué, c'était son fils, Henri van Blarenberghe, dont j'avais encore la lettre près de moi, pour y répondre : « Il faut espérer toujours... je ne sais ce que me réserve 1907, mais souhaitons qu'il nous apporte un apaisement, etc. » » (« Sentiments filiaux d'un parricide », *CSB*, p.155)
- 17 « Un drame de la folie », *Le Figaro*, vendredi 25 janvier 1907, p.3.
- 18 記事の誤り、父親の死は1906年5月7日である。
- 19 « Il tue sa Mère et se suicide », *Le Matin*, vendredi 25 janvier 1907, p.1-2.
- 20 実際は短刀である。記事のなかでは「フィガロ」紙と同様「銃は発射されなかった (mais le revolver ne partit pas)」となっている。
- 21 「フィガロ」紙では「母に銃口を向けた。弾は出なかった (il voulut faire feu sur elle. Le coup ne partit pas)」となっている。
- 22 「フィガロ」紙の記事の最後には、ブルースト警視ではなく、ルブルースト警視 (M. Leproust, commissaire de police) という名前が挙がっている。
- 23 « Henri ! Henri ! Tais-toi ! Qu'as tu fait ? » (« Il tue sa Mère et se suicide », *op.cit.*, p.2)
- 24 « La douleur ne tue pas en un instant, puisqu'il n'est pas mort en apercevant sa mère assassinée devant lui, puisqu'il n'est pas mort en entendant sa mère mourante lui dire, comme la princesse Andrée dans Tolstoï : « Henri, qu'as-



- tu fait de moi ! qu'as-tu fait de moi ! » (« Sentiments filiaux d'un parricide », *op.cit.*, p.156)
- 25 « Le meurtrier, en plus des blessures qu'il s'était faites avec son poignard, avait tout le côté gauche du visage labouré par un coup de feu. L'œil et des fragments d'organes pendaient sur l'oreiller. » (« Il tue sa Mère et se suicide », *op.cit.*, p.2)
- 26 « En dehors des blessures qu'il s'était faites avec son poignard, il avait tout le côté gauche du visage labouré par un coup de feu. *L'œil pendait sur l'oreiller.* » Ici ce n'est plus à Ajax que je pense. Dans cet œil « qui pend sur l'oreiller » je reconnais arraché, dans le geste le plus terrible que nous ait légué l'histoire de la souffrance humaine, l'œil même du malheureux Œdipe ! » (« Sentiments filiaux d'un parricide », *op.cit.*, p.156)
- 27 « Et en songeant à la douleur d'Henri van Blarenberghe quand il vit sa mère morte, je pense aussi à une autre fou bien malheureux, à Lear étreignant le cadavre de sa fille Cordelia. « Oh ! elle est partie pour toujours ! Elle est morte comme la terre. Non, non, plus de vie ! Pourquoi un chien, un cheval, un rat ont-ils la vie, quand tu n'as même plus le souffle ? Tu ne reviendras plus jamais ! jamais ! jamais ! jamais ! jamais ! Regardez ! Regardez ses lèvres ! Regardez-la ! » » (*Ibid.*, p.156-157)
- 28 « Pourtant, le Malheureux n'était pas mort. M. Proust le prit par les épaules et lui parla : M'entendez-vous ? Répondez. Le meurtrier ouvrit l'œil intact, cligna un moment puis retomba dans l'atonie. » (« Il tue sa Mère et se suicide », *op.cit.*, p.2)
- 29 « Malgré ses horribles blessures, Henri van Blarenberghe ne meurt pas tout de suite. Et je ne peux m'empêcher de trouver bien cruel (quoique peut-être utile, est-on si certain de ce que fut en réalité le drame ? Rappelez-vous les frères Karamazou) le geste du commissaire de police. « Le malheureux n'est pas mort. Le commissaire le prit par les épaules et lui parla : « M'entendez-vous ? Répondez ». Le meurtrier ouvrit l'œil intact, cligna un instant et retomba dans le coma. » À ce cruel commissaire j'ai envie de redire les mots dont Kent, dans la scène du *Roi Lear*, que je citais précisément tout à l'heure, arrête Edgar qui voulait réveiller Lear déjà évanoui : « Non ! ne troublez pas son âme ! Oh ! laissez-la partir ! C'est le haïr que vouloir sur la roue de cette rude vie l'étendre plus longtemps. » » (« Sentiments filiaux d'un parricide », *op.cit.*, p. 157)
- 30 « On croit, il semble avéré qu'une fois son forfait commis, le fou, après être rentré chez lui, envisagea ce qu'il venait de faire. Il arracha un revolver d'une panoplie, essaya de le faire. Il arracha un revolver d'une panoplie, essaya de le charge, n'y parvint pas, en prit un autre, recommença, puis encore. Enfin, avisant un fusil de chasse, il glissa une cartouche dedans, appuya l'arme sur sa tempe gauche et fit partir le coup. » (« Il tue sa Mère et se suicide », *op.cit.*, p.2)
- 31 « Tant que les fous frappent, ils ne savent pas, puis la crise passée, quelle douleur ! Tekmessa, la femme d'Ajax, le dit : « Sa démente est finie, sa fureur est tombée comme le souffle du Notos. Mais ayant recouvré l'esprit, il est maintenant tourmenté d'une douleur nouvelle, car contempler ses propres maux quand personne ne les a causés que soi-même, accroît amèrement les douleurs. Depuis qu'il sait ce qui s'est passé, il se lamente en hurlements lugubres, lui qui avait coutume de dire qu'il était indigne d'un homme de pleurer. Il reste assis, immobile, hurlant, et certes il médite contre lui-même quelque noir dessein. » (« Sentiments filiaux d'un parricide », *op.cit.*, p.155)
- 32 « Le drame, ou du moins la première partie, avait eu lieu. » (« Il tue sa Mère et se suicide », *op.cit.*, p.2)
- 33 「プルーストにおける変容と中動態」については論を改めて検討する。Cf. 國分功一郎 前掲書 第8章「中動態と自由の哲学 スピノザ」 p.229-263.
- 34 « Si j'ai répété avec insistance ces grands noms tragiques, surtout ceux d'Ajax et d'Œdipe, le lecteur doit comprendre pourquoi, pourquoi aussi j'ai publié ces lettres et écrit cette page. J'ai voulu montrer dans quelle pure, dans quelle religieuse atmosphère de beauté morale eut lieu cette explosion de folie et de sang qui l'éclabousse sans parvenir à la souiller. J'ai voulu aérer la chambre du crime d'un souffle qui vint du ciel, montrer que ce fait divers était exactement un de ces drames grecs dont la représentation était presque une cérémonie religieuse, et que le pauvre parricide n'était pas une brute criminelle, un être en dehors de l'humanité, mais un noble exemplaire d'humanité, un homme d'esprit éclairé, un fils tendre et pieux, que la plus inéluctable fatalité — disons pathologique pour parler comme tout le monde — a jeté — le plus malheureux des mortels — dans un crime et une expiation dignes de demeurer illustres. » (« Sentiments filiaux d'un parricide », *op.cit.*, p. 157)
- 35 「プルーストにおける本質と中動態」については論を改めて検討する。Cf. 國分功一郎 前掲書 第8章「中動態と自由の哲学 スピノザ」 p.229-263.
- 36 « Il paraît que les amis de Van Blarenberghe ont été froissés d'un article qui ravivait leur douleur ! Non pas « ses commentaires » mais commenté. » (A Reynaldo Hahn, le mercredi soir 6 février 1907, *Correspondance VII*, Plon, p.70)
- 37 Robert Dreyfus, *op.cit.*, chap. VII, p.156.
- 38 « — Qu'as-tu fait de moi ! qu'as tu fait de moi ! » Si nous

voulions y penser, il n'y a peut-être pas une mère vraiment aimante qui ne pourrait, à son dernier jour, souvent bien avant, adresser ce reproche à son fils. Au fond, nous vieillissons, nous tuons tout ce qui nous aime par les soucis que nous lui donnons, par l'inquiète tendresse elle-même que nous inspirons et mettons sans cesse en alarme. Si nous savions voir dans un corps chéri le lent travail de destruction poursuivi par la douloureuse tendresse qui l'anime, voir les yeux flétris, les cheveux longtemps restés indomptablement noirs, ensuite vaincus comme le reste et blanchissants, les artères durcies, les reins bouchés, le cœur forcé, vaincu le courage devant la vie, la marche alentie, alourdie, l'esprit qui sait qu'il n'a plus à espérer, alors qu'il rebondissait si inlassablement en invincibles espérances, la gaieté même, la gaieté innée et semblait-il immortelle, qui faisait si aimable compagnie avec la tristesse, à jamais tarie, peut-être celui qui saurait voir cela, dans ce moment tardif de lucidité que les vies les plus ensorcelées de chimère peuvent bien avoir, puisque celle même de don Quichotte eut le sien, peut-être celui-là, comme Henri van Blarenberghe quand il eut achevé sa mère à coups de poignard, reculerait devant l'horreur de sa vie et se jetterait sur un fusil, pour mourir tout de suite. Chez la plupart des hommes, une vision si douloureuse (à supposer qu'ils puissent se hausser jusqu'à elle) s'efface bien vite aux premiers rayons de la joie de vivre. Mais quelle joie, quelle raison de vivre, quelle vie peuvent résister à cette vision ? D'elle ou de la joie, quelle est vraie, quel est « le Vrai » ? » (« Sentiments filiaux d'un parricide », *op.cit.*, p. 158-159)

- 39 « Ainsi, pour la première fois, ma tristesse n'était plus considérée comme une faute punissable mais comme un mal involontaire qu'on venait de reconnaître officiellement, comme un état nerveux dont je n'étais pas responsable ; j'avais le soulagement de n'avoir plus à mêler de scrupules à l'amertume de mes larmes, je pouvais pleurer sans péché. [...] J'aurais dû être heureux : je ne l'étais pas. Il me semblait que ma mère venait de me faire une première concession qui devait lui être douloureuse, que c'était une première abdication de sa part devant l'idéal qu'elle avait conçu pour moi, et que pour la première fois, elle, si courageuse, s'avouait vaincue. Il me semblait que si je venais de remporter une victoire c'était contre elle, que j'avais réussi comme auraient pu faire la maladie, des chagrins, ou l'âge, à détendre sa volonté, à faire fléchir sa raison, et que cette soirée commençait une ère, resterait comme une triste date. [...] Certes, le beau visage de ma mère brillait encore de jeunesse ce soir-là où elle me tenait si doucement les mains et cherchait à arrêter mes larmes ;

mais justement il me semblait que cela n'aurait pas dû être, sa colère eût été moins triste pour moi que cette douceur nouvelle que n'avait pas connue mon enfance ; il me semblait que je venais d'une main impie et secrète de tracer dans son âme une première ride et d'y faire apparaître un premier cheveu blanc. Cette pensée redoubla mes sanglots, [...] » (I, p.37-38)

- 40 Cardane (本名 Jules Cardon) 「フィガロ」紙の編集長。
- 41 « Une chose me désole, car elle accroît encore la disproportion entre l'indignité de l'article et votre délicieuse bienveillance. On a supprimé la seule chose que j'avais fait déclarer à M. Cardane essentielle, lui disant qu'il pouvait couper tout ce qu'il voudrait plutôt que l'omettre de dernières lignes. En effet dans ma précipitation j'avais le matin envoyé l'article sans une fin. Sur épreuves j'en ajoutai une où je rassemblais mes rênes, divagants. L'article finissait ainsi : « Rappelons-nous que chez les Anciens il n'était pas d'autel plus sacré, entouré d'une vénération, d'une superstition plus profondes, gage de plus de grandeur et de gloire pour la terre qui les possédait et les avait chèrement disputés, que le tombeau d'Edipe à Colone et que le tombeau d'Oreste à Sparte, cet Oreste que les Furies avaient poursuivi jusqu'aux pieds d'Apollon même et d'Athènes en disant : « Nous chassons loin des autels le fils parricide. » Ainsi ce mot de parricide qui avait ouvert l'article le refermait. Une sorte d'unité était imposée par là à l'article. » (A Gaston Calmette, le vendredi 1<sup>er</sup> février 1907, *Correspondance VII*, p.53)
- 42 « Votre article était très beau, mon cher collaborateur et excellent ami. Ne vous préoccupez pas de ces quelques lignes : elles ont effrayé Cardane qui a cru y voir un blâme insuffisant pour l'acte du malheureux parricide. Cardane s'est assurément trompé : mais il n'est pas un lecteur qui ne vous remerciera et relira le cœur charmé. » (Gaston Calmette, le 1<sup>er</sup> février 1907, *Correspondance VII*, p.55-56)
- 43 « Ou plutôt si : j'ai à dire à M. Cardane [...], qu'un de ses confrères du *Journal des Débats* d'autrefois, *St-Marc Girardin*, qui ne passait pas pour immoral, a écrit dans son *Cours de Littérature Dramatique* des pages fort élevés sur cette croyance des Grecs que la ville remporterait toujours la victoire qui garderait les cendres d'Edipe et d'Oreste. Il y voyait l'effet de la haute philosophie des Grecs qui avaient voulu que le crime même involontaire de ces parricides fût puni de leur vivant, mais que pour rétablir une justice plus haute, comme ils avaient été involontairement criminels, leur mémoire fût honorée, sacrée. Aussi bien le sévère M. Cardane (qui est d'ailleurs si bon et charmant) doit savoir toutes les guerres que soutinrent Athènes et Sparte pour pouvoir s'emparer du corps d'Edipe et du



- corps d'Orestes dont les oracles avaient prédit que seuls ils pourraient assurer la grandeur de la cité. » (A Gaston Calmette, soir 1<sup>er</sup> février 1907, *Correspondance VII*, p. 56-57)
- 44 國分功一郎 前掲書 p.29.
- 45 « *St Julien l'Hospitalier* le citer dans Van Blarenberghe. S'en souvenir toujours. » *Le Carnet de 1908*, 16 v°, *Cahiers Marcel Proust 8*, établi et présenté par Philip Kolb, Gallimard, 1976, p.69.
- 46 Gustave Flaubert, *Legende de Saint Julien l'Hospitalier* dans *Trois Contes*, Charpentier, 1877.
- 47 *Cahiers Marcel Proust op.cit.*, p.154-155.
- 48 『ブルースト全集』第15巻 筑摩書房 1968年 p.605.
- 49 同書 p.607.
- 50 « Mais, comme Elstir, comme Chardin, on ne peut refaire ce qu'on aime qu'en le renonçant. » (IV, p.620)
- 51 Je me disais non seulement : « Est-il encore temps ? » mais « Suis-je encore en état ? » La maladie qui, en me faisant, comme un rude directeur de conscience, mourir au monde, m'avait rendu service « car si le grain de froment ne meurt après qu'on l'a semé, il restera seul, mais s'il meurt, il portera beaucoup de fruits », la maladie qui, après que la paresse m'avait protégé contre la facilité, allait peut-être me garder contre la paresse, la maladie avait usé mes forces, et comme je l'avais remarqué depuis longtemps notamment au moment où j'avais cessé d'aimer Albertine, les forces de ma mémoire. Or la récréation par la mémoire d'impressions qu'il fallait ensuite approfondir, éclairer, transformer en équivalents d'intelligence, n'était-elle pas une des conditions, presque l'essence même de l'œuvre d'art telle que je l'avais conçue tout à l'heure dans la bibliothèque ? Ah ! si j'avais encore eu les forces qui étaient intactes dans la soirée que j'avais alors évoquée en apercevant *François le Champi* ! C'était de cette soirée, où ma mère avait abdiqué, que datait, avec la mort lente de ma grand'mère, le déclin de ma volonté, de ma santé. Tout s'était décidé au moment où, ne pouvant plus supporter d'attendre au lendemain pour poser mes lèvres sur le visage de ma mère, j'avais pris ma résolution, j'avais sauté du lit et étais allé, en chemise de nuit, m'installer à la fenêtre par où entrait le clair de lune jusqu'à ce que j'eusse entendu partir M. Swann. Mes parents l'avaient accompagné, j'avais entendu la porte s'ouvrir, sonner, se refermer... (IV, p.621)
- 52 ブルーストは1920年2月18日、ジャック・リヴィエール宛の書簡で、「もう一言、今、ジッドの素晴らしい文章を読んだところです」とこの小説について示唆している。  
 (« Encore une ligne, je viens de lire les page magnifique de Gide. », A Jacques Rivière, le mercredi 18 février. *Correspondance XIX*, p.127) 『新フランス評論』82号は、1920年2月1日刊行となっているが、印刷工のストライキのため実際に発行されたのは2月20日、ブルーストはこの見本を2月18日に受けとっていた。( *Correspondance XIX*, p.144)
- 53 « Maintenant vous penserez beaucoup aux jours d'autrefois où vous l'aviez. Quand vous vous serez habitué à cette chose affreuse que c'est [d'être] à jamais rejeté dans l'autrefois alors vous la sentirez tout doucement revivre, revenir prendre sa place, toute sa place, près de vous. » (A Georges de Lauris, le lundi soir 18 février 1907, *Correspondance VII*, p.85)
- 54 « [...] si vous vous efforcez trop vous ne pourrez pas vous la représenter. [...] En ce moment tâchez simplement de vivre, de survivre, en laissant tout cela se faire en vous sans collaboration de votre volonté et les douces images renaîtront d'elles-mêmes pour ne plus jamais vous quitter. » (A Georges de Lauris, peu après 18 février 1907. *Ibid.*, p.87.
- 55 « [...] car les vrais paradis sont les paradis qu'on a perdus. » (IV, 449)
- 56 « Et alors l'écrivain se rend compte que si son rêve d'être un peintre n'était pas réalisable d'une manière consciente et volontaire, il se trouve pourtant avoir été réalisé et que l'écrivain lui aussi a fait son carnet de croquis sans le savoir.» (IV, 478-479)
- 57 « [...] il s'écria en lui-même : « Dire que j'ai gâché des années de ma vie, que j'ai voulu mourir, que j'ai eu mon plus grand amour, pour une femme qui ne me plaisait pas, qui n'était pas mon genre ! » (I, 375)

(あおやぎ・りさ 一般教育等／フランス文学)  
(受理日 2018年11月7日)

